修士論文(要旨)
2009 年 1 月

# 境界性パーソナリティ特性尺度作成の試み

指導　中村延江教授

国際学研究科
人間科学専攻
２０７J５００９
木村久美

# 目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第１部　先行研究
　第１章　パーソナリティ障害・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　第２章　境界性パーソナリティ障害・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　第３章　既存の心理尺度について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
　第４章　近年の動向・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

第２部　本研究
　第１章　目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
　第２章　予備調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
　第３章　本調査１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
　第４章　本調査２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
　第５章　再検査法による信頼性の検討・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60

第３部　総合考察
　第１章　本研究結果の要約・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
　第２章　本研究の考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
　第３章　本研究の今後の課題と展望・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67

引用・参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69

謝辞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74

資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76

【問題と目的】

境界性パーソナリティ障害（Borderline Personality Disorder:BPD）は、DSM-Ⅲに採用されるまでに、統合失調症とも神経症とも判断しがたい境界圏の臨床群が注目され始めてから、現在の BPD 概念に結実するまでに数十年の議論があったとされている(成田,2006)。また、DSM-Ⅲが注目されるようになったことで診断の低年齢化が指摘され(岡田,2006)、あわせて症候群的連続説(Millon＆Everly,1985)の流れを受けて、パーソナリティ障害を一般人からの数量的変化として捉えることが着目されるようになっている。さらに、エビデンスに基づく治療が重視される流れもうけ、量的測定の必要性が論ぜられている(井沢,2002)。以上のことから、客観的測定を行うための尺度が必要であると思われるが、わが国においては、統計学的な信頼性や妥当性の検証を重視した BPD に関する尺度開発がなされていない。

そこで、本研究では、一般健常者と BPD のクライエントとに連続性を認めるという視点に立ち「境界性パーソナリティ特性尺度」として標準化することを目的とする。

【方法】

（１）予備調査：BPD 尺度を作成するために、DSM-Ⅳ-TR やわが国で開発された BPD に関する尺度を参考に検討し、予備項目として 87 項目を得た。

（２）本調査１：調査は 2006 年から 2007 年に集団調査法で行った．調査対象者は、関東圏内の大学生および専門学校の学生であった．回答方法には、全ての項目について「１（まったくあてはまらない)」～「６（たいへんよくあてはまる)」の６件法を採用した。

（３）本調査２：本調査１によって作成された境界性パーソナリティ特性尺度が、外的基準、すなわち既存の BPD に関する尺度に照らしあわせたとき、どの程度関連性があるかという基準関連妥当性について検討することを目的として行った。

（４）再検査法による信頼性の検討：本調査２によって作成された、ボーダーライン特性尺度について再検査法を実施し、尺度の信頼性の確認をすることを目的とした。

【結果】

因子構造を明らかにするために、SPSS16.0 を用いて探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転)を行い、多重因子負荷項目を除くと同時に因子負荷量が 0.40 に満たない項目を削除した。その後、各因子の信頼性を検証するため、信頼性係数（Cronbach のα係数）を算出した。男女総合と男女別の３つのデータにおいて、それぞれ構造の異なる解釈可能な４因子が抽出され、さらに下位因子の認められるものもあったため、抽出された因子についてそれぞれ命名を行なった。

また、既存の尺度である BSI（町沢,1989）と MCMI-Ⅱ境界性スケール日本語短縮版（井沢ら,1992）を用いて基準関連妥当性の検討を行なった結果、関連性がみとめられ、特に両者の尺度の内容について、本調査で作成した尺度の第１因子との相関が高いことが示された。さらに、臨床的意義の高いとされる BSI を用いて、境界性パーソナリティ特性尺度における BPD 傾向を示す得点は、被調査者の BSI の高低について判別分析を行った結果、BSI 得点の高低を判別

するには、F1 が最も有効であること、F2 依存、F3 感情のコントロール、F4 家庭環境は有効性が低いことが示された。判別的中率は、全体で 97.7%であり、BSI 得点の高かった群に対しては 100.0%の的中率が認められ、低い群に対しては 95.1%の的中率があることが示された。

【考察】

因子構造を明らかにした結果、4 つの解釈可能な因子とそれに付随する下位因子が認められた。各因子構造の信頼性と妥当性の検討が行われ、十分な結果を得ることができたと推察される。その因子構造については、DSM-Ⅲに採用され、認知された BPD の概念にとどまらず、DSM に採用されるまでに統合失調症とも神経症とも判断しがたい境界圏の臨床像が着目されてから現在に至るまでの BPD の概念について考えられてきたその構造について、因子論的に説明することができたものであることが諸研究との比較によって明らかとなった。また、一般健常者を対象とした本研究が BPD 特性を説明することのできる因子構造を見いだすことができていることからは、近年のパーソナリティ理解としての連続性を支持したものであったことが示唆される。このことは、BPD の診断基準には当てはまらないものの、BPD に類似したパーソナリティ特性を持った一群がいると考えることが妥当であることを示唆しているものと推察される。

尺度として使用する為にはいくつかの問題点も指摘されうるが、BPD に関して統計的な視点からの研究がなされてこなかったことに対しては、統計的な処理によって作成された本研究の尺度が、これまでの BPD 研究に類似した構造を見いだす結果であったことは、近年の心理テストに求められる科学的手段としての尺度として意義のあるものであることが示唆された。本研究において作成された尺度について、他の母集団での調査や臨床群での調査を実施し適応可能性を広げることで、心理臨床におけるアセスメントや介入研究の実施、BPD 傾向理解への一助となると考えられる。

# 主な引用・参考文献


Gunderson, J.G.＆Singer, M.T. (1975). Difiniting borderline patients：An overview. American Journal of Psychiatry, 132(1), 110

Gunderson, J.G.＆Hoffman P.D (2005). Understanding and Treating Borderline Personality Disorder American Personality Disorder American Psychiatric Publish Inc.

Hoch, P.＆Polatin, P. (1949). Pseudo neurotic forms of schizophrenia. Psychiatry Quarterly, 23(2), 248-276

萩生田伸子・繁枡算夫 (1996). 順序付きカテゴリカルデータへの因子分析の適用に関するいくつかの注意点 心理学研究, 67(1), 18

林直樹・佐藤美奈子 (2006). 境界性パーソナリティ障害最新ガイド - 治療スタッフと家族のために - 星和書店

井沢功一朗 (2002). 境界性人格特性 下山晴彦・丹野義彦 講座臨床心理学 4 異常心理学Ⅱ 東京大学出版会 Pp.69-82

井沢功一朗・大野裕・浅井昌弘・小此木啓吾 (1995). ミロン臨床多軸目録 - Ⅱ境界性スケール短縮版の構成とその妥当性・信頼性の検証 精神科診断学, 6, 473-483

井沢功一朗 (1997). DSM-Ⅳ第Ⅰ軸障害と重複する境界性人格障害諸症状の検討 心理臨床学研究, 14(4), 393-402

井沢功一朗 (2005). ボーダーライン・スキーマ質問紙（BSQ）の作成 心理臨床学研究, 23(3), 273-282

河合隼雄・成田義弘 (1998). 境界例 日本評論社

Knight,R (1945) Psychoanalytic Psychiatry and Psychology. New York:International Universities Press.

木村宏之・市田勝・神谷栄治・成田義弘・木村哲也・近藤三男・寺西佐稚代・外ノ池隆史 (2006). 境界性人格障害（BPD）の個人精神療法について治療者へのアンケート調査 精神神経学, 108(8), 801-812

町沢静夫・佐藤寛之 (1991). 境界性人格障害の下位分類の試み - ボーダーラインスケールの数量的解析を通じて 精神医学, 33(11), 1201-1209

町沢静夫 (1994). 境界性人格障害と大うつ病の認知的および症候論的違いについて 精神医学, 36(7), 713-720

町沢静夫 (2001). DSM-Ⅳの問題点と DSM-Ⅳ-TR の紹介 精神療法, 27(5), 488-494

Millon,T. (1987). Manual for the MCMI-Ⅱ（2nd ed）. Minneapolis : National Computer Systems.

Millon,T.&Everly, G.S. (1985). Personality and its disorders: A biosocial learning approach. Wiley& Sons

成田義弘・市田勝・近藤三男・神谷栄治・加藤洋子・木村宏之・木村哲也・寺西佐稚代・外ノ池隆史 (2003). 境界性人格障害の個人精神療法 - 文献検討から - 精神療法, 29(3), 275-283

成田義弘 (2006). 境界性パーソナリティ障害の精神療法 - 日本版治療ガイドラインを目指して - 金剛出版

高橋三郎・大野裕・染谷俊幸 (1996). DSM-Ⅳ精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院（American Psychiatric Association 1994 Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Fourth Edition American Psychiatric Association WashingtonDC）